

若手教員とベテラン教員の協働による 校内OJTモデルの開発

～普通教室のICT環境での授業を前提として～

米沢市立東部小学校

〒992-0026
山形県米沢市東1丁目6-102

<http://www.educ.yonezawa.yamagata.jp/toubu/>

1 研究の背景

本校は市内では大規模校に位置づけられ、毎年2名の新規採用教員が配属されている。また、定年を迎え退職する教員も少なくない。教職員の年齢構成は、年々、急速な若返りが進んでおり（図1）、学級担任による学習指導や生徒指導などの指導力の差が大きくなった。この課題を解決するため、個別に若手教員を育成してきたが、時間や労力の面でも無理が生じてきた。そこで私たちは、学校が一つのチームとなり、教育力を高めていくことで、子ども一人一人に合った教育の実現をしていくべきだと考えた。

これは、本校に限らず全国的に重要視されている課題である。文部科学省は、「チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会」を作り、議論している。

このように、学校が一つの組織となり、若手教員への系統的、組織的なOJTの育成システムの構築による資質の向上が早急に望まれるなか、本校の研究課題を「若手教員とベテラン教員の協働による校内OJTモデルの開発」と設定し、公益財団法人パナソニック教育財団の特別研究指定校を受けて、平成26年度からの2カ年計画で研究に取り組んだ。

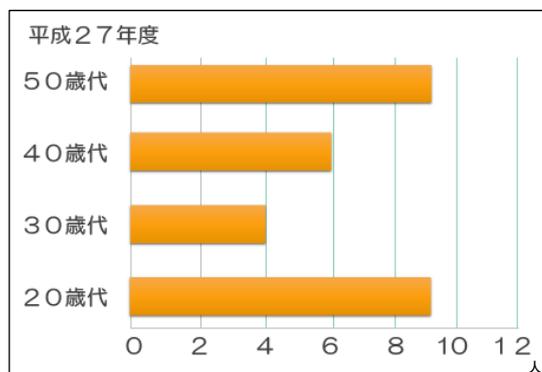


図1 本校の年齢構成グラフ

2. 研究の目的

全ての教職員が自分の持ち味を最大限に活かしながらも、「チーム学校」として同じベクトルのもとで教師力を高めていく必要がある。そのためには、若手とベテランが密に連携できる組織を作り、統一した基準や方法を話し合っ可視化し、共通話題のもとで授業の改善を図り、教師力の向上をねらう研修システムを構築していかなければならない。そして、その研修システムは日々の教育活動の中で持続可能であり、どの学校においても実践可能なものでなければならない。

そこで、研究の目的を以下のように設定し、研究実践していくことにした。

学校が一つの組織となって教師力を高めていくために、日々の教育活動のなかで、意図的、計画的、組織的、かつ、持続可能な研修による東部小のOJTシステムを開発し、他校への啓蒙普及を図る。

3 研究の方法・内容

研究課題に迫るために3つのアクション（A・B・C）を設定した。（図2）

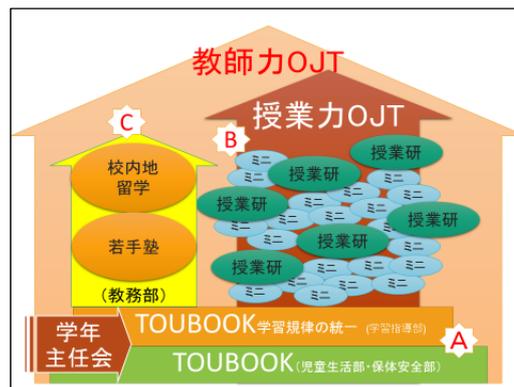
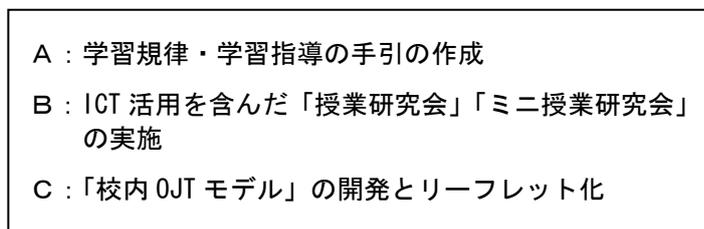


図2 研究構想図

A：学習規律・学習指導の手引の作成

学習指導部を中心に、全教職員の共通理解のもとで東部小としてそろえたい学習指導の「当たり前」の項目を細かに定めた手引を作成することとした。さらに、児童生活部を中心に、教師力を高める土台となる生徒指導の内容を、保体安全部では保体安全指導などの内容を検討することとした。これらの内容は、学年主任会、および学年会での検討を重ね、具体的な指導方法を明文化した手引（「TOUBOOK」）を作成することとした。

学期ごとに自己評価をすることで自身の指導を振り返り、次学期の指導改善に活かすようにした。さらに、この「TOUBOOK」を加除修正スタイルにし、学期ごとに項目の検討をしていくようにした。つまり、作成する過程でも、作成した後も検討を重ねることで、OJTを推進させ、若手とベテランの協働のもとで指導力の向上を目指していけるようにした。

B：ICT活用を含んだ「授業研究会」「ミニ授業研究会」の実施

学校全体での統一した指導を土台としたうえで、ICT活用を含んだ授業研究会やミニ授業研究会を実施し、授業力の向上を目指すようにした。

授業力向上の手段の一つとして、実物投影機などのICTを使った授業公開を定期的実施し、ICTの効果的な活用法を共通の話題として授業研究をしていくことにした。普段の授業を改善していくという考えのもと、本時中心の学習指導案（見開き2ページ）を作成し、全員がプレーヤーという意識で授業公開をしていくことにした。

授業公開後は、具体的な指導場面を話すワークショップ型事後研究会を設定し、若手とベテランを意図的に構成したグルーピングにした。ベテランが話し合いのコーディネーターを、若手が話し合った内容を発表する役割を分担し、若手とベテランがともに学び合い、明日に活かす研究会にしていくようにした。

C：「校内OJTモデル」の開発とリーフレット化

「若手塾」と「校内地留学」を教務部の計画で実施し、意図的に校内OJTの推進を図ることにした。

ベテラン教員が若手教員に授業技術や学級経営のノウハウを伝える「若手塾」は、月に2回放課後に実施することにした。1学期は講義形式で、ベテラン教員が若手に伝えたいテーマの講座を企画した。2学期からは、若手がベテラン教員に学びたいテーマを設定し、各自の実践を交流しながら討論し、最後にベテラン教員にアドバイスをしてもらう形式にした。ベテランと若手両方の視点で指導力について学べることをねらった。

また、ベテラン教員に丸1日シャドウィングしながら、授業技術や生徒指導などについて学ぶ「校内地留学」では、日頃はなかなか見られない実際の生徒指導の現場を見ることで、若手教員が、明日からの自分の指導にすぐに生かすことをねらった。丸1日教室を空けることになる学級には、学級外の教員が補欠として入り、授業を進められるよう配慮した。

4 研究の経過

(1) 平成26年度（一年次）

- ・わかる授業を支える「学習規律」の徹底

ベテランの教員が考える「最低限、若手にできてほしいこと」や「若手に伝えたいこと」の観点で学習指導項目を厳選し、その項目を各指導部、及び学年会で検討をし、学校で統一した学習規律「東部スタンダード」を作成した。(図3)

「児童にさせたいこと」と、「教師が気をつけたいこと」の2観点に分けて、学習指導にあたることとした。明文化したことで指導すべき内容が明らかとなり、全教員が共通理解のもとで児童の指導に当たることができた。指示が通りやすくなったり、言われなくても子どもたち自身でできる姿が見られたりして、授業がしやすくなったという教員の声が聞かれた。

《教師が気をつけたいこと》 <small>項目(学年・学級の実態に応じて取り組む。)</small>		<small>自己チェック(できた○できなかった×)</small>					
項	目	4月	5月	10月	12月	2月	計
1	子どもに聞こえる声で話す。						
2	子どもを見て話す。						
3	話し方 話す言葉を精選する。						
4	強弱をつけて話す。						
5	間を空けて話す。						
6	指示通りできているか確認してから次に進む。						
7	指示通りできない時は、やり直しをさせる。						
8	示したいものを指ささないようにして、指示棒を使う。						
9	作業のときは机をきれいにさせる。						
10	一文一つのことを指示する。						
11	「指でおさえなさい」と、学習する場所を確実に指示棒を出す。						
12	できていない手を短くほめる。						
13	作業がけ やつていない手を短く注意する。						
14	ICTで映すものと板書するものを決める。						
15	前時との違いをはっきりさせる。						
16	活動のバリエーションを増やす。						
17	めあてを確認する。						
18	授業 最後の本時のまとめをやる。						
19	子どもの意見に対して、先生がすぐに正誤を出さない。						
20	「なるほど」と言ったり、他の子の意見も聞く。						
21	子どもの意見に対して、「どうして?」と返しの発問する。						
22	活動の命題にかきながら進める。						
23	書くことを怠りながら進める。						
24	板書中にらつと子どもを見る。						
25	板書 チョークと色鉛筆(ペン)の関係のルール(黄=青)を教える。						
26	黒板は定規を使って書く。						

<small>堀田 龍也先生の言葉より</small> 『 追い込み過ぎない程度に100%を目指そう! 』		<small>自己チェック(できた○できなかった×)</small>					
項	目	4月	5月	10月	12月	2月	計
持入れ	筆入れの中には、『学習のきまり』を守って入れる。						
	道具袋の中には、のり・はさみ(学年の実態に応じたもの)を入れる。						
	机の横にかけるものは、通路側に紅白ぼうし、反対側に道具袋をかける。						
	引き出しの右側に教科書・ノート類を置き、左側に筆入れやクーピーなどを置く。(基本的に)						
始業前	次の時間の教科書やノートを机の上に準備してから休憩する。						
	水を飲んだり、トイレに行ったりすることを始業前に済ます。						
	時計を見てはじまりの時刻までに席に着く。						
	始業と終業時のあいさつは、全員で元気にする。						
	名前を呼ばれたら、元気に「はい」と返事をする。						
	授業中は「さん」「くん」をつけて呼ぶ。						
	机の上には教科書を左に、ノートを真ん中に、筆入れを奥側に置く。(右利き)						

図3 学校で統一した指導を目指して作成した「東部スタンダード」

- ・ICTの活用法を探る

全ての普通教室に実物投影機を設置し(図4)、まずは使ってみるところから始めた。使っていく過程で、どう使うのかという操作方法の話題から、何を、いつ、どのように映せば効果的かという話題に移行していった。

また、実物投影機だけでなく、デジタル教科書を取り入れた授業づくりが始まったり、フラッシュ型教材の研修会を実施したりして、活用の幅が広がった。

児童へのアンケートにおいて、「テレビに大きく映すと、勉強が分かりやすいか」という問いに、およそ8割がよくあてはまると答えていることから、ICT活用が授業の一部となっていること、そして、児童の理解を促進していることにつながっていると見える。



図4 普通教室でICT環境を統一

・「校内OJT」の確立

「若手塾」では、時間の捻出法から教科指導など多岐にわたるテーマで若手教員の研修が進んだ。ベテラン教員にとっても、自分の指導技術などについて振り返る機会となった。



図5 校内地留学の様子

「校内地留学」を4度実施し(図5)、その都度、学んだことをレポートにまとめ、自分の明日の指導に活かす学びの場となった。

また、「TOUBOOK」の作成を開始した。章立てをして、社会人・教育公務員としての心構え、サービス・校務処理、学級経営、学習、生徒、保体安全指導についてチェック項目を作った。また、別冊「保護者面談の進め方」も作成した。これらを使って、若手塾で各自の振り返りをしたり、学年会でチェック項目の検討がなされたりした。

これまでの研修を継続しながら、持続可能なシステムにしていくことが次年度の課題となった。

(2) 平成27年度(二年度)

・意味づけを意識した指導へ

統一した学習指導の2年目の効果が年度当初から表れた。昨年度より東部スタンダードによって学習規律を統一してきたため、学年が変わっても、クラス替えをしても、年度当初から学習指導がスムーズに進んだ。

二年度は、なぜその指導をする必要があるのかという意味づけを明確にして指導にあたることにした。これまでは学習指導で教師が気を付けること、及び児童にさせたいことを「TOUBOOK」(図6)に文章のみで表記していたが、そこに指導の意義を付け加え、写真も追加することで、全校で指導の徹底を図ることを加速させた。

また、新たにICTを活用した漢字指導に全校で取り組み、家庭学習の内容も各学年系統立てながら統一を図った。そのねらいは、いずれは自立した学習者へと成長するために、学習内容のみならず学習方法も身に付けさせることにあった。

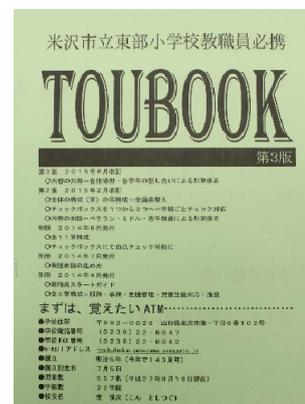


図6 TOUBOOK表紙

・のべ92授業の公開

今年度は授業研究会、ミニ授業研を合わせると合計92個の授業公開がなされた。

1人2回以上は授業を公開した。その都度、学年部、教科部で教材研究を重ね、学習指導案を作成し、模擬授業を行った(図7)。



図7 教科部による教材研究、学年部による模擬授業の様子

また、授業後に行う事後研究会では、毎回、学習規律、ICT 活用、授業づくりの3観点に絞って本時の指導案、板書写真をもとに話し合いがなされた。ワークショップ型で行い、ベテランが進行、若手が話し合った内容をまとめて発表する役割を担うことを継続した(図8)。ベテランの無駄のない進行により、授業の本質に迫った話し合いがなされ、回を重ねるごとに、若手の発表スキルが向上していき、その後の各自の指導に活かしたり、授業を見る目を養ったりすることにつながった。



図8 事後研究会の様子

・より持続可能な校内OJTへ

研究推進委員は校務分掌の部長で構成した。「TOUBOOK」の改訂に関わる実践は児童生活部、学習規律・学習指導の統一は学習指導部、学習しやすい教室環境の整備、課外練習会の指導法に関するOJTについては保体安全部が担うことにした。どの学校においても、OJTが推進可能である組織にすることを意識したものである。

また、市内教頭会、教務主任部会、研究主任部会へ校内研究会への参加を呼びかけ、「TOUBOOK」を配布し本校のOJTシステムの説明を行い、その意義を理解してもらった。市外、県外からの視察が増え、今後、本校のOJTシステムが普及していくことが期待される。

「若手塾」(図9)「校内地留学」は教務部によって計画的に実施された。回を追うごとに若手のまとめるレポートが整理され、研修したことが自分のものになっていることがうかがえた。また、若手塾とは言いつつも、ベテラン教員も主体的に参加したり、アドバイザーにベテランを起用したりすることで、自身のこれまでの指導を振り返りきっかけとなり、ベテランも若手とともに学び合う集団づくりがなされている。



図9 「若手塾」の様子

5 研究の成果

A：学習規律・学習指導の手引の作成について

全教職員の共通理解のもとで、具体的な指導方法について検討、整理し、明文化した手引を作成したことで、学校として教育の質の均一化が図られた。

また、「TOUBOOK」を用いて学年、専門部等で確認し、変えるべき項目、変えるべきでない項目について検討し合う過程こそが、若手教員とベテラン教員の学び合いの場となった。

B：ICT活用を含んだ「授業研究会」「ミニ授業研究会」の実施について

授業力を向上させる手段の1つとしたICT活用の学び合いをきっかけに、教材研究、授業技術についてもベテランと若手の活発な学び合いに発展した。

C：「校内OJTモデル」の開発とリーフレット化

「若手塾」「校内地留学」でベテラン教員が指導法などを見せたり、教えたりする行為を通して、ベテラン教員自身にとっても学びの場となった。

ベテラン教員が若手教員に教えることで、若手に刺激を受けてベテランが学ぶという、学校全体での教師力向上につながっている。

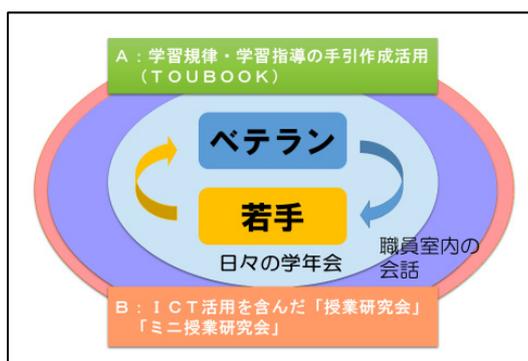


図10 研究の成果

図10のように、様々なOJT研修を繰り返すことにより、若手教員は学年内や職員室内での普段の会話から、指導の様々なノウハウを教えてもらうという、本来のOJTのあるべき姿に近づいた。

それは、本校のOJT研修の内容を若手が実践するときに、研修だけでは学びきれない内容を学ぶために、学年や職員室内でのOJT研修が活発になったと考えられる。

本校のOJTモデルは、様々なOJT研修と普段の学年や職員室内でのOJTが両輪となって進んでいる。

また、この2年間で市内の教頭会、教務主任部会、研究主任部会に対して校内研究会を公開してきた。それにより、本校が開発してきたOJT研修の良さに気づき、「TOUBOOK」を参照したり、授業研究会の仕方を取り入れたりする学校が増えてきた。小中連携で、学習規律を統一していくという試みも行われている。

「TOUBOOK」については県外からの問い合わせも増え、今後、さらなる普及が期待できる。

6 今後の課題・展望

- ・「TOUBOOK」のさらなる活用を探る。

より東部小のルールに合ったもの、指導の手順が分かるものに改良していく必要がある。また、年度初め・学期初めに全職員で一斉にチェックする時間を設けて、意思統一を図っていきたい。

- ・ベテラン教員の視点にも迫る。

「教える」から「ともに考える」のスタンスを大切にして取り組んできたOJTは、ベテラン教員のどのような意識が働いて活性化していくのかを検証していく必要がある。

- ・OJTシステムの啓蒙・普及

開発してきた東部小の安定的な校内OJTシステムが、さらに市内外の各校に広がっていくように、校内研究会を積極的に公開していきたい。また、今後もさらに教員の若返りが進むなか、持続可能なOJTシステムになっていくように検討を続けていく。

7 おわりに

本校の職員室には自由に教え合い、学び合う雰囲気にあふれている。教師として、人間として高め合う雰囲気は「チーム東部」としての賜物である。それが、結果的には子どもたちにも良い影響をもたらし、学校力の向上につながっている。

研究の機会を与えてくださった公益財団法人パナソニック教育財団の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。また、東北大学大学院堀田龍也教授には、常に温かく、的確に、より先を見通した指導をしていただいた。それは、本校の、そして教職員一人一人の財産となった。深く感謝申し上げたい。